

2 - (4) マアジ新規加入量調査

志村 健

目的

長崎県五島から鳥取県沿岸に至る海域で中層トロール網を用いたマアジ幼魚を採集し、その分布パターンと海洋環境との関係の解明、および水塊の配置を考慮したマアジ幼魚の加入量を推定することを目的とした。

方法

隠岐諸島周辺海域における生物分布特性を把握するために、第一鳥取丸(199トン)に設置された計量魚探(カイジョー, KFC-3000)を用い、マアジ当歳魚を対象として音響データを収録し、中層トロール網を用いて対象魚種の分布傾向と加入量を調べた。2008年5月から6月にかけて、鳥取県西部から長崎県五島周辺の海域において、30~60マイルの調査定線を設定し、1ラインにつき3~4回合計87地点で中層トロール網での漁獲調査を実施した(表1, 図1)。

結果

幼魚の分布と豊度を調べた(図2)。2008年は5月19日から6月11日にかけて、合計85地点で中層トロール網での漁獲調査を実施した。中層

トロール網による試験操業の結果、合計26,794尾のマアジが採捕され、マアジの大きさは、3~5cm程度のもが多く採取された。これまでの調査で16以下の冷水が沿岸へ差し込み沿岸域に暖かい水を押し付けるような形となる2003年や2005年には調査点あたりの採集量が非常に多くなる傾向が見られる。マアジ幼魚の2008年の分布状況を見ると、冷水域が接岸傾向にあったためマアジ幼魚の適水温と考えられる水温16~18(深度50m)の暖かい水が沿岸域へ押し付けるような形となり山口から鳥根県沿岸においてマアジ幼魚が濃密に分布していた。幼魚は、水塊配置と流れ場によって分布域と分布密度が変化し、冷水域が接岸する部分ではマアジが濃密に分布するため平均採集尾数のみでは加入量を正確に表すには不十分である。このことから、加入量を推定するには、幼魚の分布水温帯の面積で平均採集尾数を重み付けする必要がある。そこで、図1に示す4海域の海域別水温帯別の平均採集尾数と、水深50mの水温帯(2毎)の面積を求め、これらを掛けて加入量を算定した(図3)。加入量は2003年の調査開始以降過去最高値を記録した。

表1 2003~2008年の調査状況

年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
調査開始	5/20	5/26	5/25	5/24	5/22	5/21	5/19
調査終了	6/12	6/18	6/10	6/12	6/16	6/13	6/11
調査点数	48	78	99	98	92	87	85
漁獲のあった調査点数	42	57	51	66	77	74	78
漁獲の無かった調査点	16	21	48	32	15	13	7
総採集尾数	1,840	12,092	1,895	10,078	7,191	5,509	26,794
平均採集尾数(採集さ)	43.8	212.1	37.2	152.7	93.4	146.9	343.5
標準偏差	83.94	328.6	76.6	301.8	338.4	641.5	1060.6

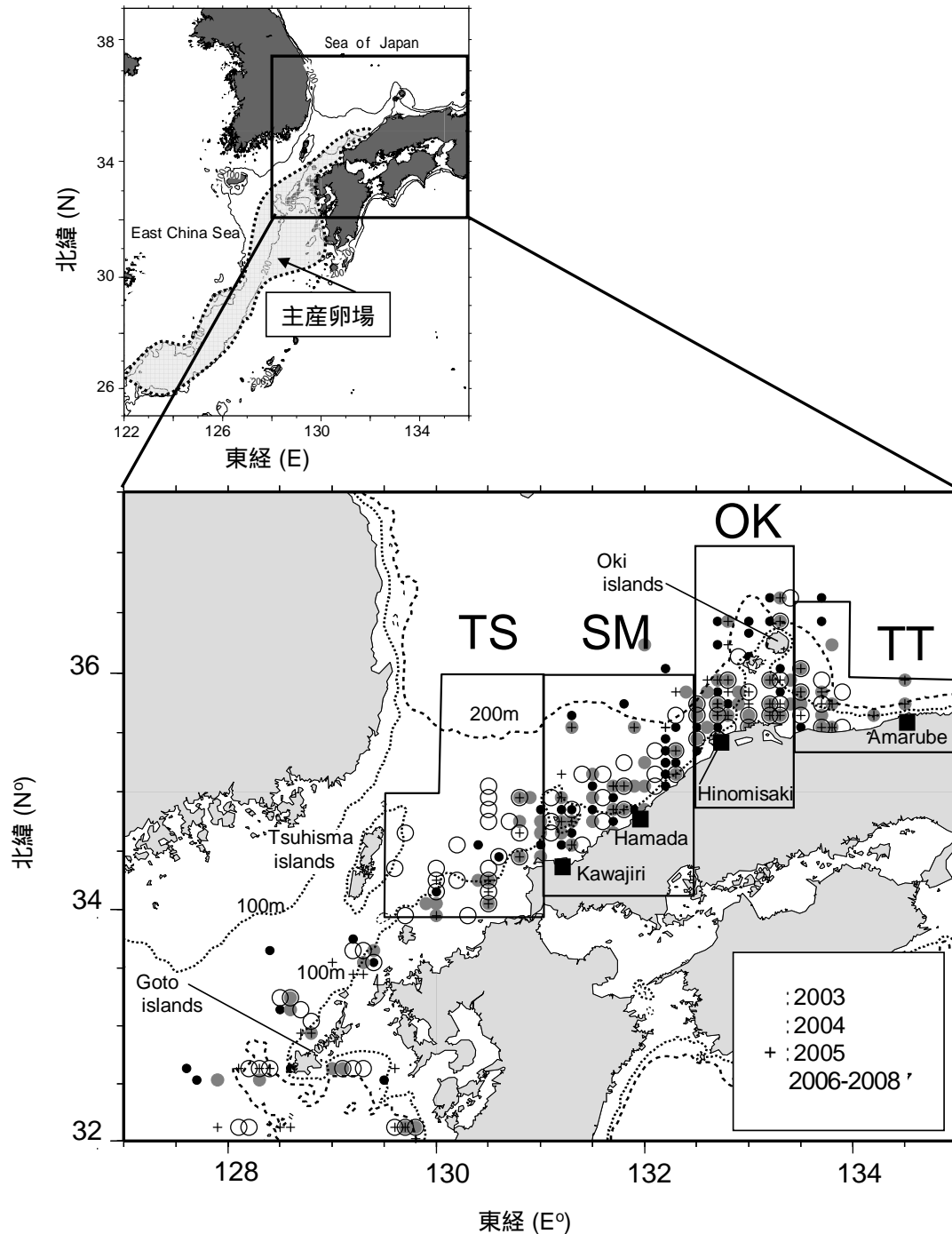


図1 マアジの産卵場 (依田ら, 2004; Sassa et al., 2006) の模式図 (上図).
 マアジ幼魚の採集海域および ADCP 観測定線 (下図).
 図中の ○ : 2003, ● : 2004, + : 2005, □ : 2006-2008 年はそれぞれ採集点を示す.
 日御碕沖の St.1 から St.18 への点線は測流調査の定線を示す.
 調査海域中の実線で囲んだ海域は、それぞれ加入量を推定するための海域区分を示す
 (TS:対馬, SM:島根, OK:隠岐, TT:鳥取).

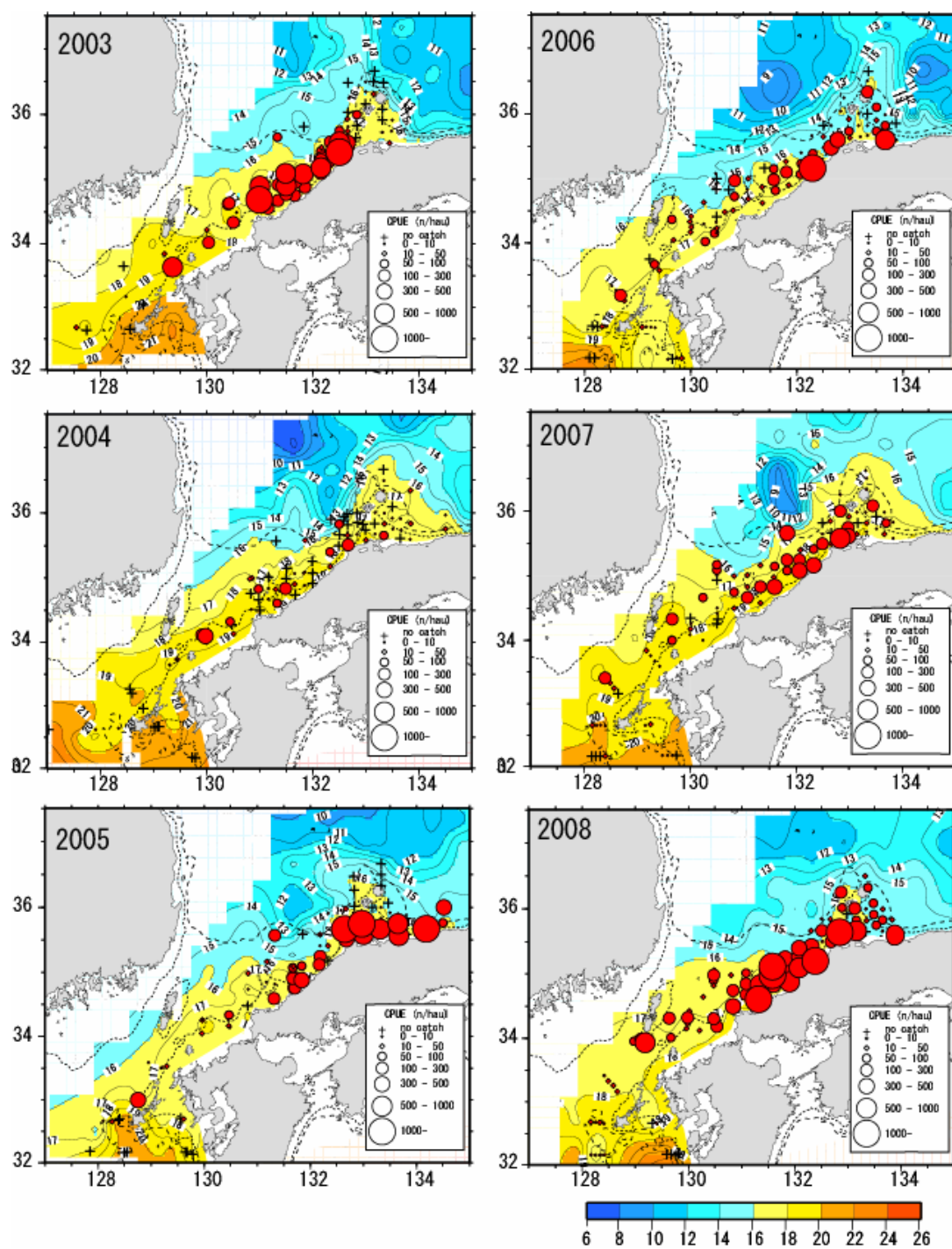


図2 2003～2008年のトロール網調査結果 円の大きさはマアジの採集量の多さを表し，+は採集されなかった点を表す．カラー部分は水深50mの水温分布を表す．

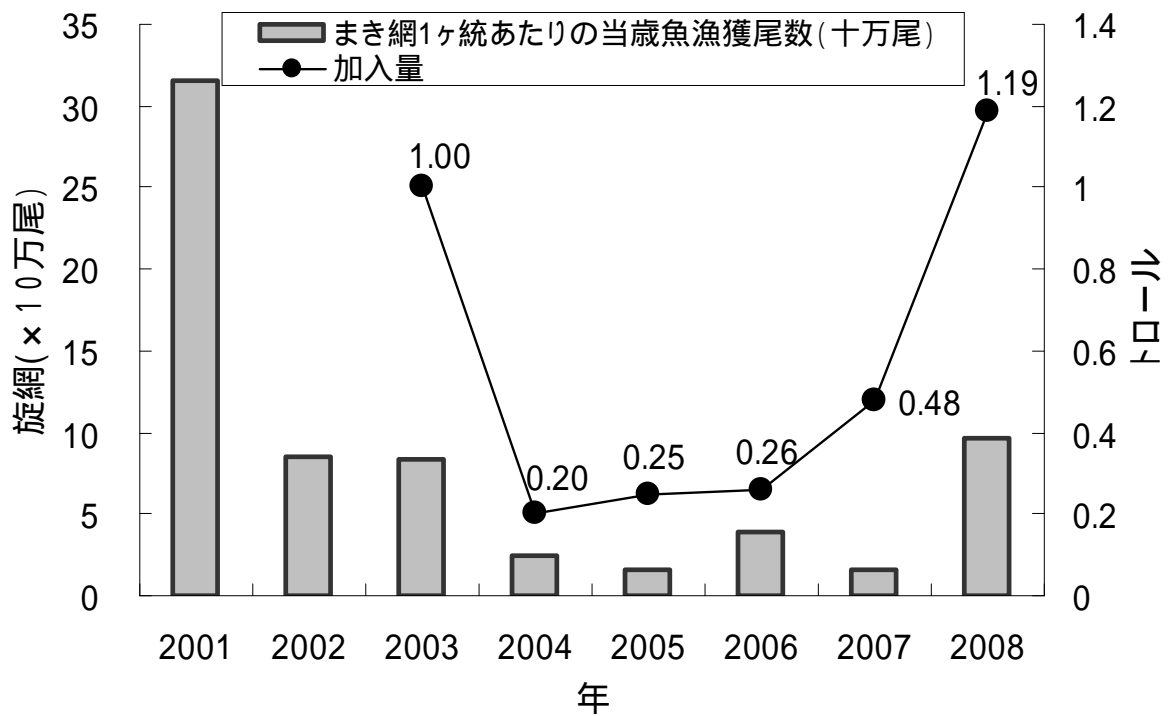


図3 試験操業結果から求めた加入量と境港におけるまき網1ヶ統あたりの当歳魚漁獲尾数(6~12月に水揚げされたマアジ当歳魚の尾数を水揚げしたまき網の数で割った値)の年変化